

博士論文要旨及び学位論文審査結果要旨

保健医療学研究科保健医療学専攻 博士後期課程 作業療法学分野 学籍番号：2216005 氏 名：川田 智尋		学 位 授 与 年 月 日	令和7年 3月 12日
		博士論文受理年月日	令和6年 12月 6日
		論文審査終了年月日	令和7年 2月 18日
博士論文名	訪問リハビリテーション利用者の疾患別における同居家族の介護負担感に関する研究		
論文要旨	介護保険制度における在宅サービスに位置付けられている訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）は、日常生活活動の向上や生活空間の拡大、Quality of Lifeの向上や、介護者である家族の介護負担の軽減に効果が示されている。このように対象者本人の生活機能や活動・参加への改善に対する直接的な介入のみならず、主介護者の介護負担にも着目し、介助方法の指導や住宅改修などの環境調整指導といった間接的な介入を図っていくことも重要とされている。 本研究は、訪問リハを継続して利用している利用者の主介護者である同居家族において、介護負担感（Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版；J-ZBI_8）に関連する要因を疾患特性別（脳血管疾患，大腿骨頸部骨折，パーキンソン病の3群）に明らかにすることを目的とし，横断調査および経過を追った調査をおこなったものをまとめたものである。 【研究の概要】 研究1では，単一施設の訪問リハ利用者に対して，本人とその同居家族それぞれに対して質問紙調査を実施し，介護負担感に関連する要因を分析した．結果，介護負担感には訪問リハに対する期待の一致率及が有意な負の相関を示した．このことより，本人と家族の間の訪問リハに期待する内容の異同が家族が感じる介護負担感の増大と関連していることから，本人と家族が訪問リハの内容を適切に理解し共通認識をもってもらうことにより家族の介護負担軽減につながる可能性がある． 研究2では，多施設を対象とし，研究対象の数も増やしたうえで，訪問リハ利用者とその同居家族に対して質問紙調査を実施した．結果，研究1と同様に家族の介護負担感には訪問リハに対する期待の一致率が有意な負の相関を示し，その相関の強さは疾患ごとに異なった．このことより，本人の主疾患によっては家族の介護負担感に対して相応の配慮が必要と考える． 研究3では，研究2の対象について半年後に再調査を実施し，介護負担感の変化について疾患別の特性を検証した．結果，脳血管疾患と大腿骨頸部骨折の群で介護負担感の軽減を示し，脳血管疾患の群では期待一致率が高くなるほど家族の介護負担感が低くなる傾向があった．このことより，本人の主疾患が脳血管疾患の場合では，本人と家族との共通認識を保ちながら訪問リハを継続することが，介護負担感の軽減につながる可能性を示唆する． これら3つの調査結果より，訪問リハの利用者の同居家族の介護負担感に関連する要因について，利用者本人と家族の間に存在する訪問リハに期待する内容の異同が関連することが示された．また，疾患別に比較することで脳血管疾患，大腿骨頸部骨折，パーキンソン病とそれぞれに特性が認められ，訪問リハの支援時に利用者本人の疾患に応じた配慮が必要であることを示唆する．		

学位論文審査結果要旨	主査：作業療法学分野教授 外川 佑 副査：作業療法学分野教授 菊池昭夫 副査：看護学分野教授 桂 晶子 【新規性・有効性】 本論文は訪問リハビリテーション利用者を疾患別に分類し、その家族の介護負担感に焦点を当てた研究である。特に、療法士の介入によって変化させることのできる可変変数として、本人と家族が訪問リハに対する期待の異同を変数（期待一致率）として扱い、アウトカムである家族の介護負担感を変えうる可能性があることを示した点で新規性・有用性があると判断した。 【信頼性】 研究１では家族の介護負担感に単一施設の訪問リハ利用者に対して、本人とその同居家族それぞれに対して質問紙調査を実施し、家族の介護負担感に関連する要因を分析している。その中で、運動器疾患の群において、訪問リハに対する期待一致率・家族満足度が高いほど家族の介護負担感の尺度である J-ZBI_8 が低いことが示されている。 研究２では多施設を対象に家族の介護負担感に関連する要因について、疾患別に検討している。期待一致率については、パーキンソン病よりも脳血管疾患において有意に低かった。脳血管疾患では介護負担感と、期待一致率、FIM、FAI との間にそれぞれ負の相関が認められ、大腿骨頸部骨折では期待一致率と負の相関を認めたことが示されている。 研究３では研究２と同様の対象について、さらに６か月後のデータも追跡した前後変化、その変化に関連する介入内容の特徴を明らかにしている。 特に、単一施設研究である研究１の結果（大腿骨頸部骨折では期待一致率と負の相関を認めたことについて）が、多施設研究である研究２でも引き続き支持されている点、さらに研究３の結果については先行研究と同様の傾向が見られたことなども引用して考察し、本研究の信頼性は担保に努めている。 【総評】 本学位論文における研究３については分析や結果の揭示および考察などに課題を残しているが、研究１と研究２はともに学術論文において publication されていることや、一定の知見が得られていること、さらには審査会や論文発表会においても質問に適切に回答できており、博士の取得にふさわしいと判断した。 今後、研究３については、その成果を学術雑誌で公表することが望ましい。
------------	---